

忍者

は

浮気を

許さない

添牙いろは



忍者は浮気を許さない

添牙いろは

## 目次

12月6日(木)	『僕が抱える女の子たち』	3
10月31日(水)	『私は貴方をオカズにしたい』	29
11月3日(土)	『ここで脱ごうと彼女は言った』	72
11月4日(日)	『全裸の下校が初デート』	123
11月9日(金)	『貴方が私を孕ませて』	167
12月25日(火)	『裏切り者のクリスマス』	197
12月26日(水)	『その代償は全裸夜行』	213
12月27日(木)	『あたしは浮気を許さない』	231
12月29日(土)	『裸の二人に挟まれて』	247
1月4日(金)	『みんなで全裸で初詣』	273

12月6日（木）

『僕が抱える女の子たち』



僕、輝山工祐は、弱い人間だ。

きやまこうすけ

今まで僕はやりたいことだけしかやってこなかった。高校には進学したものの、勉強はそっこのけで大好きなコンピュータプログラミングに明け暮れ、三年目の二学期が終わろうという十二月に入っても勉強らしい勉強に手を付けてすらいない。

こんな僕を受け入れてくれる進学先などありはしないが、そこは気にしていない。今まで培ってきたプログラミング技術を手土産に就職活動に励めば良い。これでも、パソコン雑誌に二度ほど掲載された実績がある。企業側も僕を無視することはできないだろう。

だから、これからも好きなこと、楽しいことだけやっていけばいい……そんな甘いことを考えていた。その結果が前の授業の爆睡だ。

教師が懸命に来週の試験範囲をこれみよがしに解説していたようだが、僕はそれを一聴もせずに夢の中にいた。そこではキチンと授業を聞いていたのだが、講義内容は支離滅裂で、現実世界の試験の役には立ちそうもない。

僕の授業の終了を告げたのはベルの音ではなく、後頭部に突き刺さる硬くて重い直方体の一撃だった。

その力学的エネルギーの伝達によって頬杖から外された僕の頭は運動エネルギーに位置エネルギーを加え、鋭い速度を以って形ばかりに広げられた卓上のノートに激突させられたのだ。た。

「今の授業、来週の試験の範囲を解説してたわよ。それを終始寝飛ばすとは大した自信ねえ？」

上から降ってくる女の声に、軽症を負った僕の額を労る様子はない。一方の僕も、まあ何というか、このやりとりに慣れてきてしまっているところもある。何事もなかったかのように平然と顔を上げ、暴行の加害者の小言に応じる。

「来週は試験なのか……初耳だな」

「アンタにとっては全ての授業予定が初耳でしょうよ!!」

何も聞いてないんだから! と、手にした英和辞典をキレ気味に再度振り上げるこの女の名は鷹池裸足。僕と同じ日向見学園〇〇学校三年B組の同級生であり、当クラスの学級委員を務めている優等生であり、元・同じ部活の部長、そして、中学一年生からの短からぬ付き合ひでもある。

それだけに、高校からの級友たちは知らない彼女の意外な一面を、僕は知っている。

例えば、先月彼女が長かった髪をバツサリ切った時、周囲は皆一様に驚いていた。しかし、彼女は元々ショートカットだったのだ。中三頃から伸ばし始めたので、ロングの鷹池しか見たことのない同級生たちには、さぞ新鮮に映ったただだろう。

会う人会う人口々に『イメチェンか?』と騒ぎ立てる様子を遠目で眺めながら、一人『懐かしい』と感じていることに、些細な優越感を抱いたりしたものだ。

あとは、鋭い眼光を幾ばくも和らげることはない眼鏡は実は伊達、とか、昔はそこまで目つきも険しくなかった、とか、むしろ、些細な事で傷ついては、すぐ涙目になっていた……とか。それらとは別に、最近見せるようになった『裏の顔』もあるのだが……。

セーラー服の向こう側を思い出して、つい彼女のふくよかな胸部を凝視してしまう。それに気づいた鷹池は慌てて両腕で覆い隠して僕を睨みつける。

「どこ見てんのよ。スケベ！」

これが『表の顔』の反応だ。僕としても、この場に裏を出されてはマズイので、紳士的に鷹池の身体から視線を逸らす。

鷹池の『コホン』というわざとらしい咳払いを戻すサイン。眼鏡の奥の凛々しい瞳で僕を悠々と見下ろしながら、彼女は僕の机の上に一冊のノートを開いた。綺麗な文字で、授業内容が解りやすく纏めてある。

「範囲は私がノートに取っておいたわ。明日コピーを渡すから、試験前くらい予習しときなさいよ」

鷹池は、眼鏡のつるをくいと正し、『感謝しなさい』と自分のノートを畳むと、短くなった後ろ髪をふわっと靡かせて自分の席へと帰っていった。

こうして、僕は夢の中で授業を受けていたにも関わらず、夢の外の授業内容を把握することができたのだった。

思えば、コンピュータゲーム部に所属していた頃は、今以上に授業を聞いていなかった。それで、成績がガタ落ちしてしまい、今では卒業できるかどうかのギリギリのラインだ。とはいえ、ギリギリながらも落第が確定せずに済んでいるのは、この成績優秀な鷹池のお陰といえる。これまで、僕の前では眉間に皺を寄せっぱなしで、それでも僕と関わることを止めないのは、

同じ部活のよしみかと思っていたのだが……それだけではないことを知ったのは、つい一ヶ月前のことだった。

高校三年間だけに収まらない長い付き合いで、お互い知り尽くした仲のつもりだったが、まだまだ知らないこともあるんだな、と思わされた一件だった。

鷹池のおかげで試験に対する憂いもなくなり、一日の授業を終えて帰宅した僕は、手早く夕飯の支度を済ませ、夜勤の母を仕事へと送り出した。

食器を片付けて一息ついたところで、僕の携帯のマナーモードが机の上でガタガタと踊り始める。

発信者名に『鷹池』と表示されている時点で、何の用事かすぐに判ってしまった。

通話ボタンを押してスピーカに耳をつけると、こちらが『もしもし』と告げる間もなく

「家？」

と一言だけ、まるで暗号のように問い掛けてくる。実際、僕たちの間だけで通じる暗号のよななものかもしれない。

「家」

と僕が一言だけ答えると、そのまま通話は切れた。そして……

ピンポン。

と、玄関の呼び鈴が鳴るのだった。電話から五分も経ってないのに。もしかしたら、うちに来ながら儀礼的に確認しただけなのかもしれない。

扉を開けると、

「こーちゃん……」

疲れきった表情の幸薄そうな女の子が立っていた。

昼間は綺麗に整えられていた艶やかな髪はヨレて、涙目に潤んだ瞳に眼鏡は掛かっていない。玄関脇の壁に掛けてあるハンガーも目に入らないようで、着て来たコートは土間にボトリと脱ぎ捨ててしまった。

中から現れたカーデイガンのボタンは留め間違えてズレている上に、ブラウスの裾は半分だけジーンズの中に入り気味。だらしがない、というよりむしろレイプ後的なこの鷹池を、昼間の彼女を知る者なら、本当に同一人物かと疑いたくもなるだろう。第一、〇校に入ってから『こーちゃん』などという呼び名を人前で聞いたことは一度もない。

しかし、この弱々しく壊れかけた姿こそが、中学生時代の彼女に近い、素の鷹池裸足なのだ。ヨロヨロと靴を脱ぎながら玄関と直結したダイニングに足を運ぶ鷹池に僕が

「今日はどうした？」

と声を掛けると、鷹池は黙って僕の胸に額を預ける。

「だって……数学の問題じゃない……」

その声があまりに力ないので、僕は黙って鷹池の頭を撫でてやる。

「他の人のミスは黙ってスルーするくせに、何で私だけわざわざ指摘するのよ……！」

どうやら鷹池は、今日の数学の授業で教師の設問に対する回答の板書をした時、漢字の誤りがあったのを悔やんでいるようだった。

そんなことをイチイチ気にする必要もないと思うのだが、本人は真剣に落ち込んでいるので、慰めてやることにする。

「学校でのお前は最優秀生徒だからな。教師としても、『あの鷹池が間違えるとは珍しい』くらいに驚いただけだろう」

「うん、そう思う」

謙遜もせずに、鷹池はシレつと言ってのける。

「でも、さっきからそのことが引つかかっちゃって……試験勉強にも集中できないの……」

僕の胸で溜息をつき続ける彼女を元気づけるには……これしかないのだろうな。僕は、ズボンをモゾモゾと弄り始める。

すると……

「おちんぽっ♡♡」

これこそ、学校での鷹池しか知らない人には、まさか彼女が発した言葉だとは絶対に思わないだろう。

僕のズボンの隙間を目掛けてしゃがみ込んだ鷹池は、今はまだ柔らかなそれを迷いなく口に

含んだ。彼女の舌に触れられて、口の中でどんどん大きく、どんどん硬くなつていくのが判る。「わあ……こーちゃんのおちんぼが大好きな形になつたあ……♪」

成績優秀品行方正な学級委員が、男性器に向かつて嬉々とした声を上げ、むしろぶりつくなんて、クラスの人たちは想像もできないだろうな。ちよつと前まで、むしろ毛嫌いしていたモノを、ふとしたキツカケで一転して狂気にも似た執着を持つようになり、今では啞えて離そうともしない。

数学の授業のことも忘れて、鷹池はアイスクャンディを与えられた子供のようになり、僕の股間に舌を這わせる。

「フニャフニャも可愛くて好きだけどお、やっぱりカチカチが大好きい……。だつておまんこ気持ち良くしてくれるもおん……♥」

言い終わると、今度は唇をすぼめて頭のところを扱しき始めた。彼女が顔を前後させながら柔らかく傘をめくるように刺激すると、僕の口からも快樂の溜息が漏れる。

口で僕を愛でながら、鷹池は羽織つてきたカーディガンをするりと脱ぎ落とし、自分のブラウスのボタンを外していく。何の恥じらいもなく、一つ一つ、丁寧に。全て脱ぎ終わってはらりと肌蹴ると、彼女の下着に包まれた大きな谷間が顕になった。そのレースをのんびり觀賞することも許さず、鷹池はそれをも当然のように取り払う。

「こーちゃん……見てえ……。私のおっぱい……。乳首こんなに大きくなつちやつてる……。こーちゃん専用のおっぱいだから、先つぽまでじっくり見てえ……。♥」

昼間はちよつと視線を向けただけで隠そうとした胸を、今では見せつけるように僕の身体を柔らかく挟み込む。彼女の谷間から顔を出した僕の頭からは、焦らされて我慢しきれなくなったものが少しずつ滲み出していた。それを、鷹池の舌は僕の割れ目に沿って舐め取っていく。「こーちゃんのエッチ汁……美味しい……でもお……みるくの方をゴクゴクしたいなあ……。おちんぼみるく、ぴゅぴゅーって射精してよお……」

今はうつとりと先端に夢中になっているが、彼女が本当に望んでいるものを、僕は知っている。

「鷹池……子供はいらないのか？」

「いる！ 孕ませてっ！」

『子供』という単語に反応してぱつと身体を離し、丸く屈んだままゴロンと背中から転がる。

そして、両足を高々と上げた格好で、ズボンの中の下着ごとスポンと脱ぎ捨ててしまった。

何一つ身に纏わぬ生まれのままの姿で、M字開脚ならぬV字開脚の鷹池。

「ほおら、こーちゃんの大好きなおまんこだよー！ おまんこもこーちゃんのこと大好きだよっ♡」

彼女も相当欲情していたようで、見せつけるように自分自身の両手でピンクの肉ひだを開くと、中からはトロトロと彼女の汁が溢れだし、お尻の窪みを越えて床にまで零れ落ちていく。

我慢しきれなくなった僕も手早く邪魔な下半身の衣服を下ろし、ダイニングの床に寝っ転がったままの鷹池に覆い被さる。



「鷹池……行くぞ……！」

「うん、おちんぼ来て来てえ！」

彼女が欲して止まないとところに、欲して止まないモノをヌルヌルと侵食させると、彼女の内側が歓迎するように締め付けてくる。

「鷹池……凄い締め付けだな……そんなに僕が好きなのか!？」

「うんっ！ 好きっ♥ こーちゃんのおちんぼ大好きいー！ 私のおまんこで抱きしめてあげるから、ズンズンしてえ！ ピュッピュッしてえ!!」

一度スイッチが入ると、彼女の言葉選びに容赦がなくなる。仕草や表情だけでなく、しつかりと快感を口に出して表現し始める。そして、それを聞かされる度、僕の中の熱も否応無く高まってくる。

「ふあ！ こっ……こーちゃんのおちんぼっ！ おちんぼ気持ち良すぎる！ 大好きいっ！」  
まだ射精してもいないのに、挿し入れたところからはジュブジュブと泡立つ音が僕たちの耳まで届いてくる。

「こーちゃんのおちんぼでえ……私のおまんこっ、厭らしくなっちゃうっ！ 変態になっちゃううう♥」

言うまでもなく既に変態になっている鷹池は、おちんぼおまんこ喘ぎ続ける。それに釣られて僕の鼓動も早まっていく。

「鷹池……射精るっ！ 膣内……射精すぞ……！」

「来てっ！ 来て来てえー！！ こーちゃんのおちんぼみるくいっばい射精して！ 膣内だよ  
!? 絶対に膣内だからねっ!!」

ここで、僕の我慢は限界を超えた。ビクンっ、ビクンっ、と脈を打ちながら、鷹池の奥に、彼女が望むものを注ぎ込んでいく。

「ああ……おまんこの中がこーちゃんदैいつぱい……。子宮にこーちゃんの赤ちゃんエキス……お膣なかにこーちゃんのおちんぼ……。ふあ……幸せいっばいだよ……」

ビクビクと全部出しきっても、僕たちはまだ離れない。彼女に包まれた僕の身体がまだ硬さを失っていないからだ。

「こーちゃん……勿論このままおちんぼ二回目、だよね？」

鷹池が、僕が着たままにしていた上半身の裾を持ち上げたそうしているので、両腕を上げてやる。すると、鷹池は僕と繋がったまま身体を起こし、そのままスルスルと最後の一枚を脱がしていく。

「あはっ♥ こーちゃんもスッポンポン♪ あったかあい……」

首元を舐め回しながら胸を押し付けてくる鷹池に、底なしの欲求を感じて心配になってくる。「……寝不足でまた凡ミスするなよ？」

「しないもんっ！」

彼女の身体が反論するように、膣内なかで僕の身体をぎゅっと締め付けてくる。

「そんな意地悪言うこーちゃんは、罰としておちんぼみるくを全部没収しますっ！ 私のおま

んこで残らず搾り取っちゃうから覚悟してね♥」

こうも圧迫されると、僕の中の疼きも膨れ上がってくる。すぐにでも鷹池の膾内なかを泳ぎまわりたいほどに。

しばらくは何度か欲望のままに抱き合い続けたが、僕が疲れ果てても鷹池は満足してくれなかった。

「こーちゃんは休んでいいよ♪ 私、こーちゃんとかくつついてるだけで幸せだもん！」

彼女は最初の宣言通り僕の全てを搾り取ると、射精でなくなっても、勃たたなくなっても、うちの母親が帰ってくる明け方まで僕の上で腰を振り続けるのだった……。

そんな秘め事の根も乾かぬ翌晩、僕は『彼女』と落ち合うために、少し外れにあるファーストフードショップに来ていた。ここでいう『彼女』とは、交際の異性のことを指すが、それは鷹池のこと……では、ない。

あんなことをしておきながら恋人関係になく、別に恋人がいるというのも我ながらどうかと思う。鷹池とあのような関係になってしまったのは、いわゆる腐れ縁ならではの痴情の纏れ、というやつで、良くないことだとは自覚している。それでも、未だにそれを断ち切ることができずにいたのだった。

「お待たせしましたーっ」

元気なバイトの女の子が、番号札を掲げる僕のテーブルまで注文の品を届けに来てくれた。

「……って、あたしの方はもうちよっと待っていてくださいね。十時までですからっ！」

このコが、僕の後輩であり、恋人でもある埋竹まいたけい菜だ。ぱつと見、労基法に引っかかりそうな背格好だが、色々問題ない実年齢である。彼女とは付き合い始めてひと月あまりと日は浅いが、とある秘密を共有しているためか、月日にとらわれない深い絆を、僕は感じている。

彼女は、トレイをテーブルに置きつつ、チラリといつものサインを見せてくれる。

「それでは仕事中ですので！」

何事もなかったかのように頭の両脇で結いたツインテールをはためかせながら、レジの向こう側へと帰っていった。夜も九時半を回ると仕事と呼べるほどの仕事はそう多くない。とはいえ、勤務時間内に彼氏と話し込んでいては、同僚からの心象が良くないだろうから、と僕との

は控えめにしているが……

「礼菜ー、今日も彼氏迎えに来てんの？ 羨ましいわー」

職場内での人間関係は良好なようだ。これなら、もう少し僕と話をしても良さそうなのだが、と考えてしまうのは惚気けた我儘か。

「でも、今日も学校から直でしょ？ 制服のまま夜のデートとか、警察に見つかったら一発でアウトじゃない？」

レジ仲間からのそんな社交辞令的配慮に、礼菜は

「まさかー♪ ○校の制服で長時間ウロウロなんてしませんよー」

と、ニコニコ答える。ちなみに、礼菜はともかく、僕は私服に着替えて来ている。授業が終わった後も制服を着こむほど制服好きではないし、汚すと洗濯も面倒だし。

その後も僕たちは時折初々しいカップルのアイコンタクトを交わしつつ、しばらくして礼菜のシフト終了の時間になった。

お先に失礼します、とレジの奥に引っ込んだ彼女は、セーラー服を着込んでスタッフオンリーの扉の奥から出てきた。

お疲れ様ですー、と彼女が声をかけると

「お疲れー」

「まっすぐ帰るんだよー」

と閉店処理を控えた同僚たちが見送ってくれた。

店から少し歩いて、人通りのない脇道に入ったあたりで、彼女の手がきゅつと僕を握る。こうして手を繋いで歩いていると、付き合っているのだな、と実感できて、幸せな気持ちになれる。

そして、そんな幸せな恋人同士が、寄り道もせず真直ぐ帰るはずもなく……。

「それでは、ちよつと待っててくださいね」

いつもの帰宅路のいつもの公園の前を通りかかった時、僕の手から彼女の指が離れた。彼女が一人で町内用の防災用具が入っているらしき倉庫の裏に身を隠すと、僕はいつもどおり倉庫の前で見張りである。

こちらでも準備を整えながら、背後の彼女の姿に思いを馳せる。制服でなければ、学生であることを理由に補導されることはない、と彼女は言うが……。

「お待たせしましたっ！」

倉庫裏からひよいと姿を表した彼女に制服のせの字も残っていない。さっきまで着ていた学生としての痕跡は、肩から下げられたスクールバッグにすっぽり収まっているのだろう。一回り大きくなった鞆が脇の下でモゴモゴと挟み込まれている。

バッグによって内側に押し込まれながらも谷間を作れない控えめな胸の膨らみは、それでも張りのある半球型を成しており、先端の桜色は美しく、大人らしくふくりと膨らんだ突起は公園入口に立てられた街灯からの光を受けて小さな影を落としている。

女の子特有の曲線を描く細い腰元から身体の中央に視線を移すと、そこには可愛らしいおへ

ソが凹んでいる。その真つ直ぐ下には、彼女が大人の女性であることを表す証明が茂っていた。しかし、まだ成長過程ということか、茂みは薄く、彼女の大切な場所を挟み込んで守っている。割れ目はしつかりと見えてしまっている。

その割れ目から流れる雫は内腿を伝い、夜の淡い人工の灯りをチロチロと照り返している。店内で見せてくれたサイン……スカートの裾を覗かせた時、既に彼女の下着はなかった。軽いノリで同僚と会話を交している最中も、彼女のスカートの中は極めて無防備な状態だったのだ。

ずっとこの瞬間に想いを募らせていた彼女の身体は絶え間なくサインを発し続け、帰り際にはスカートの裾を越えてしまった一筋が周囲にバレないか冷や汗をかいたものだ。

このサインは、どこまで流れ続けるのだろう。膝を超えて、鞆と共に数少ない制服の残滓である紺の靴下や革靴を濡らすまで垂れていくのかもしれない。

そんな、制服よりもなお危険な姿で、彼女は公道の真ん中に躍り出た。慌てて僕も後を追う。「流石にこの格好では寒くなってきましたね。それでは、行きましょう！」

着替えのために離れていた彼女の指先が、改めてぎゅっと僕を握る。

「コースケ君……温かい……」

但し、今度は手ではなく、先ほどの見張り中に準備していたモノだ。

ここまで繋いできた彼女の手を奪われ、手持ち無沙汰になった僕の手を彼女と同じように、僕のそこにあたる女の子の部位に触れると……

「はうっ！」

判っていないながらも、彼女は思わず声を出してしまったようだ。

歩きながら彼女の手が前後に揺れると、僕の指も彼女の先端を探るように捏ね回す。

全裸の彼女に付き添って、人通りの少ない裏道をゆっくり、ゆっくりと歩いて行く。

「あ……はあん……」

他の誰かに見つかるわけにはいかないが、彼女の膝は力なく震え、これ以上早く歩くことはできそうもない。

こうもゆったりしていると、有人の町中である以上、残念ながら誰とも合わずに済むことは叶わない。

「あ、車」

僕には判らないが、遠くからの車の接近に気づいた礼菜が呟く。すぐさま彼女がドライバーから見えないよう、道路の外側へとその小さな体を抱いて隠した。僕が彼女に服を着ることを許されているのは、まだ日付が変わる前の浅い時間帯のため、彼女を他人の目から守る必要があるからだ。

終電も終わり、本格的に街から人気がなくなると……その時僕の身がどうなるかは、察して欲しい。

程なくして、彼女の言うとおりの小さな軽自動車が出てくる。それはそのまま法定速度で通り過ぎていった。



僕としては肝が冷える思いだったが、僕の腕の中で彼女は気持ちを昂ぶらせるばかりのようだ。手で握っていた僕のそれを、今度は自分の股の間で挟み込んで、そのまま僕のズボンに腰を打ち付けてくる。

「コースケ君……♡」

車の気配がなくなると、潤んだ瞳を僕の顔に近づけ、そのまま唇を重ね合わせる。その間も彼女の腰の動きは止まらず、それどころか、僕も彼女の動きに合わせて腰を震わせてしまっていた。

上も、下も、互いの体液がぬるぬるに混ざり合い、このままでは埒が明かなくなってきた頃、礼菜がおねだりするために、僕の口から舌を抜いた。

「コースケ君……抱っこ……♪」

ハグを求めて両手を開いた礼菜の腕ではなく、まずは右足を持ち上げる。そして、

「はあんっっ!!」

大きく広げられた彼女の脚と脚の間の溝の、更に奥。彼女の最深部に通ずる洞に、彼女自身によって滑らかにされた熱棒をピツタリと差し込んだ。

「すっ……凄いです……! は、早く……子宮頸おこくに……っ!」

僕の首筋に巻きつけられた彼女の腕にも力が籠もる。二人繋がったまま、せーの、で残された左足も持ち上げて、僕の腰を抱え込んだ彼女の二本の足を下から自分の両腕でしっかりと支える。

ようやく僕たちの体勢が落ち着いたところで、彼女は腕を引き締め、唇を求めて顔を寄せる。  
 「ん……はあ……ふわあ……！」

最初は場所を気にして声を潜めていた礼菜だったが、徐々にそんな余裕もなくなってゆく。見知らぬお宅の玄関の明かりの前で快楽を貪って、気持ち良さそうに喉を鳴らしている。

「コースケ君……あたし……イキそう……イキたい！ ……だから……」

と、気分に乗せられたままに無茶なお願いを託してくる。しかし、気分が盛り上がっているのは僕も同じだ。彼女に言われるがままに進路をちよつと変更して、彼女を抱えたまま四方に信号が灯る十字路の真ん中にユツサユツサと飛び出した。幸い、車どころか人影もない。

『交差点の真ん中でイキたい』

そんな彼女の願いを叶えるため、僕は力強く、彼女の奥を指して腰を打ち付ける。

「あつっ！ はあつ、あああつっ！ イク！ イツちゃやう♥ こんな道の真ん中でっ、イツちゃいますううううっ♥」

彼女の腕が、足が、身体の全てが、苦しいほどに僕を締め付ける。ビクビクと全身を震わせる彼女の愛らしさに気が緩み、僕の中で抑えていたものも彼女の中に溢れ出してしまった。

「ああ……コースケ君もイツたんですね……あたしと一緒に……同じ場所で……」

零れた自分のものがズボンを汚しているのも構わず、僕たちは唇を触れ合わせて余韻に浸っていた。もう少し浸りたいところではあるのだが……ここでは危険極まりないので、近くのマシンの駐輪場に身を隠した。……隠したうちに入るのか？

礼菜は、要望を叶えてもらって満足した、と思いきや、更に気分を高揚させてしまったようだ。

「ここなら、コースケ君も……ね？」

と、僕の服に手を掛け始めた。

「やっぱり、身体と身体で、直に触れ合いたい……ですよね？」

ふわふわと夢心地な表情を浮かべてはいるが、指先だけはテキパキと。僕は、二人分の汚れの染み付いたズボンだけでなく、上半身まで綺麗に脱がされたしまった。

「ふああ……♡」

礼菜はお揃いの格好になれたのが嬉しいようで、僕の硬い胸板に抱きついて頬擦りしている。寒々しい冬の夜の下で、彼女の体温がより優しく感じる。

衣服越しではなく、彼女の熱が、感触が、直接伝わってきて、彼女の言うとおり、こっちの方が……気持ちが良い。

彼女の髪を、背筋を、柔らかなお尻を撫でているうちに、こんな場所にも関わらず我慢できなくなってしまう……

「……しようか」

などと、自分から今更なことを口走ってしまう。

「ええ、いいですよ♡」

礼菜は力を緩めた僕の両腕から抜け出して、停めてあった自転車の後輪泥除け上部のキャリ

アに両手を突いた。そして、僕に向かつて可愛らしいお尻をツンと向ける。

股の間からニュッと現れた彼女の二本の指が、今更改めて広げる必要もないくらい無防備な隙間を晒していた両ひだを、さらにグイと開帳させた。鮮やかなピンク色の彼女の中は艶かく駐輪場の灯りを照り返し、ぽっかりと空いた奥への入り口は彼女の呼吸に合わせて拡がったり萎んだりしている。こうして脈動する度に、白濁色の粘液がトロトロと流れ出していく。今しがた、僕の身体の中にあつたものだ。

「はいっ、どうぞ♪」

まるで教科書を貸すかのような軽い口調で、礼菜は僕のために自身の性器を差し出した。

僕は丸いお尻に指を絡め、彼女の好意を遠慮なく頂くことにした。

今さっきまで僕を咥えこんでいた彼女の身体は大きく穴を空けたままで、僕が帰ってくるのを待ち侘びているように見える。

それで、つい

「ただいま、礼菜」

なんて挨拶を口にしてしまう。

「ふふ……おかえりなさい、コースケ君♥」

そう言ってもらえると、彼女の膣内こそ、陰茎の居場所なのだと思えて心が安らぐ。

「コースケくん……あたしの膣内で遠慮なく寛いで下さいね」

礼菜は歓迎するようにお尻をグニグニと僕の骨盤へと押し付けてくる。それが彼女の中の性

感帯に当たるようで、グツ、ググツ、と膣内なかを狭めていく。

「こんなにまでなしてもらったなら……こちらからも何かご馳走ちしうしないとイケないね」

ここからは彼女の後ろ髪しか見えないが、嬉しそうな顔をしているのは彼女の身体を通して伝わってくる。

「はい……あたしの大好きなホツトミルクを……お願いします♥」

好物を期待して、彼女の柔らかな尻肉が更に僕の方に押し付けられてくる。

「今から用意するから、待ってて……!!」

パンパンパンパン！ 深夜の自転車置場に、肌と肌がぶつかる音が鳴り始めた。

「あたしもっ、お手伝いっ、しますっ!!」

僕の動きに合わせて、礼菜も腰を前後に揺り動かす。二人の勢いが一つとなって、僕のミルクポットの注ぎ口を熱くしていく。

「もうすぐ……できるよ……っ!!」

波々と溢れ出しそうなミルクを抑えつつ、僕は食卓の用意を続ける。

「はっ、はいいい!! いただき……ますううう♥」

ドクドクドクドクッ！ ドクドク……ドクドク……。

「ああっ……ミルクがあつ、ミルクがああああん！」

もう二杯目だというのに、僕が作ったホットミルクは彼女のカップから溢れ出してた。

「お味の方は口に合ったかな？」

僕は背中から彼女を抱きしめ、耳元で恭しく囁いた。

「はい、とっても美味しかったんですけど……一度にこんなにたくさん飲めませんよ……？」

受け止めきれずに肩で息をしている礼菜が可愛くて、僕は彼女の胸元をしっかりと抱え込んだ。コリコリとした女の子の硬さが気持ち良くて、ついムニムニと腕を擦りつけてしまう。

「で・す・か・ら♪」

礼菜は自転車に持たれていた上体を少しずつ起こし、腰を捻るようにニユルリと栓を抜くと、僕の腕の中で胸の方に向き直った。

そして、僕の身体を二本の腕で包み込み、ちよんと唇を触れ合わせる。

「今夜はまだまだご馳走して下さいね。食後の挨拶は、それからです♪」

忘れてはならないことだが、制服は着ていなくても僕たちは○校生だ。こんな時間に外をうろついては、他所の家庭であればこっぴどく叱られることだろう。しかし、彼女の両親は泊まりがけで家を空けることが多く、門限というものが存在しない。それは我が家も然りだ。

だったら、このような肌寒い季節の道端などではなく、親のいない家の中で……といきたいところだが、そうもいかない。以前、彼女の家に上がり込んだ際に学校で問題になりかけたことがあり、それは控えているのだ。

そして何より、外で愛しあうことこそ彼女の純粋な願いでもある。

今夜も彼女に言われるがままに寄り道やら回り道を繰り返して、その都度身体を求め合い、玄関先に送り届けた時にはとうに日付は変わっていた。

「コースケ君……今夜もたくさんごちそうさまでした♥」

自宅の前で別れのキスを交わすカップルは少なく無いだろうが、それを裸のまま行う者はそう多くない。しかし、それが彼女の日常であり、僕にとっても日常となりつつある。

「礼菜……このままだと……」

こんなことを繰り返していたは、際限なく彼女を求めてしまいたいそうさ。

「私も……。でも、明日も学校でよしね。続きは明日にしましょう」

お互い名残惜しそうに身体を離す。そして、彼女は自然な仕草で玄関の扉を開いた。服を着ていない、ということ以外は、本当に普通の帰宅風景だ。

「おやすみなさい、コースケ君♥」

扉を閉じながら手を振る恋人を見届けて、僕もようやく踵を返す。一人でこの姿は寒さが骨身に沁みる。今は一秒でも早く、服を置いてきてしまったあの駐輪場に戻りたいものだ。

このように、二人の女の子と交互に身体を交え続ける日々がしばらく続いた。

僕には名実ともに礼菜という彼女がいる以上、鷹池との関係はすぐにも清算しなくてはならない、と解ってはいた。

しかし、僕は弱い人間だ。もう〇校三年目の十二月だし、せめて卒業の日まではこのまま二人と心地よく過ごせてゆければ……などと甘いことを考えてしまっていた。

しかし、現実はそのなに生易しい願望を許さず、そう遠くもない未来、僕は彼女の逆鱗に触れてしまうのであった……。



輝山工祐の前に突如現れたきの子と名乗る後輩の少女。  
彼女との出逢いが同級生・鷹池との関係も急変させてしまう……!



※一般作品になります。

『彼女は忍者をまちがえている』のきの子視点の спинオフ!  
輝山の知らないところで繰り広げられる痴態が明らかに!?



※一般作品になります。

『彼女は忍者をまちがえている』のパラレルストーリー!  
些細なボタンの掛け違いから、二人との関係は一気に肉欲にまみれ…。  
※成人向け作品になります。



# 裸族忍者シリーズ

着衣嫌いな裸族少女が一人の男子に恋をした。  
しかし、彼女の前には強大な恋敵が立ちはだかる!  
裸の想いは、彼の元へと届くのか……!?

詳しくはWebで

<http://soekiba.net/ninja/>



わたしとあなたの  
露出交換日記



露出狂  
vs  
覗き魔

...アレ? 利害一致してね?

詳しくはWebで

<http://soekiba.net/outdoor/02/>



テロリスト  
迫り来る反逆者！  
プリンセス  
担がれる民間人！  
そして……

兄は指揮官に  
妹は銃殺刑に

アホの  
掻き乱す問題児！！

斯くして国家は  
滅びたのであった……。

妹はお風呂嫌いで  
王女は加死非が好き

ヒロインたちと性的な意味で  
身体を交える番外編！  
18歳未満の方はご購入できません

詳しくはWebで  
<http://soekiba.net/astra/>





ゲーム会社でつくった  
ゲーム

ゲームって  
……ナンだ!?

ただシナリオを追ってだけで  
ゲームと呼べるのか?  
ボタンを連打するだけでゲームなのか?  
そもそも、ゲームとは一体何だったのかを  
考える一冊です。

詳しくはWebで

<http://soekiba.net/game/>



空色書房

Sleeping under the sky